



## MAXI 15周年国際会議 Time Domain Astronomy 開催

2025年2月17日  
MAXI チーム  
(TM, HN)

- きぼう搭載の全天X線監視装置MAXIは、2009年8月の観測開始から15年を超えて連続観測中です。
- これを機に「MAXI 15周年国際会議 Time Domain Astronomy」を、2024年12月10日から12日、日本大学駿河台キャンパスにて開催しました。
- 現地参加者は121名でした(写真1)。
- Zoom参加者を入れて131名の内訳は日本人88名と外国人43名でした。日本開催にもかかわらず外国人が1/3と多いのは、MAXIの国際性と、参加者の日本への関心の高さを表しています。
- 発表件数は口頭45件とポスター41件でした[1]。
- 実は2020年に企画した「MAXI10周年会議」は、コロナ禍で中止になってしまいました。本会議は、MAXI国際会議の復活を示すとともに、MAXIともどもコロナ禍を生き延びた研究者たちの再会の喜びの会議でもありました。
- 数百年の文教の歴史高い御茶の水で、老舗レストランでおもてなしをしました(写真3)。

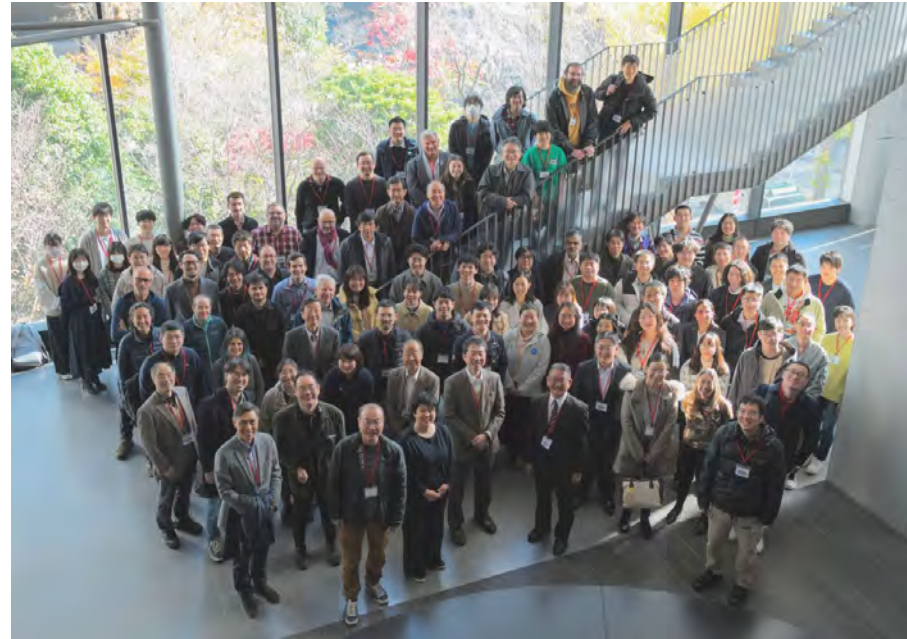


写真1. MAXI 15周年国際学会に集った研究者

# 「一期一会」 Once-in-a-lifetime chance



- 会議冒頭では、根来先生による「一期一会」の会議ポリシーが語られました(写真2)。MAXIは37個のX線新星を発見しましたが、それらの星は、次回いつ現れるのかわかりません。MAXIでの検出が、最初で最後の出会いで、またこの会場にみなさんが集まるのも、最初で最後かもしれません。この機会を大事にしましょう、という意味です。
- MAXI会議がお休みしていた5年間にも、世界は着実に進歩しました。
- MAXIは MAXI J1820+070 に代表される明るく変動の激しいブラックホール天体を数個発見しました。MAXI新星はSwift衛星やNuSTAR衛星で追観測されています。
- 2022年からはNICERと連携した即時追観測システムOHMAN(オーマン)がISS上で稼働しています。
- 新天文衛星XRISM、Einstein Probe、SVOM、NinjaSatが稼働し、観測が多彩になってきました。
- 地上のガンマ線バースト監視可視光広視野カメラGOTOは、MAXIから1時間以内にバースト残光を検出し、10時間後には10m級の望遠鏡GTCやVLTで高赤方偏移の分光観測がなされています。
- 可視光ブラックホール連星モニタ XB-NEWSは、既知天体を見張り、MAXIのX線より数週間も早く、アウトバースト開始を検出するようになりました。
- これらの関係者も会議に参加し、お互いの成果をたたえあい、2030年までのMAXI運用に向け、今後の協力体制も議論しました。



写真2. 根来先生による「一期一会」



写真3. 御茶の水の老舗でバンケットを開催。MAXI主任 松岡先生の挨拶